埋蔵文化財調査報告　第１集

# 二ッ梨一貫山須恵器窯址発掘調査概報

１９７１．３

小松市教育委員会

# 序

最近、全国各地で急激に行なわれている各種開発事業と、文化財　とくに史跡埋蔵文化財等の保護との調整問題は文化財保護行政の大きな問題となっています。

小松市においても例外ではなく、昭和４４年度以降、埋蔵文化財の発掘調査が激増しています。

加賀温泉郷ゴルフ場建設地内の窯跡、軽海住宅団地造成地内のガメ山遺跡及び弥生遺跡、二ッ梨一貫山の窯跡、矢田新丘陵地の集落址等すべて工事による緊急発掘調査であります。

これらの遺物は、すべて市立博物館に保管されていますが、発掘調査に追われて未整理のものが多い。整理済みの分から逐次調査報告書を刊行する予定です。

二ッ梨町一貫山窯跡は、南加賀古窯址群の一つで、獣脚台が発見されるなど興味ある問題を提起しています。

本書を刊行するにあたり、調査員各位にお礼を申しあげるとともに加賀古窯研究の一助になれば幸いです。

昭和４６年３月

小松市教育委員会教育長

山　崎　喜　一

## Ⅰ はしがき

昭和45年4月2日、岡下巌（北陸大谷高校教諭）氏より、二ツ梨町地内で窯址が破壊され、多量の須恵器が散乱している旨の連絡があり、山本佐一（小松市教育委員会事務局社会教育課）氏と筆者がさっそく現地に赴いた。窯址は土砂採集場の断面に露呈したもので、いまにも崩れ落ちそうな状態のなかで、かろうじて土器片の採集と遺跡の現状を確認することができた。

本窯址は奈良時代後半期（8世紀後半）に構築された須恵器窯であり、加賀温泉郷ゴルフ場内発見の窯址[1]とともに南加賀古窯址群の性格を究明するうえに貴重なものであり、出土須恵器とともに学術的価値の高いものである。

発掘調査は上野与一（日本考古学協会員）氏・土井輝男（小松市立博物館専門委員）氏の指導のもとに、小村茂（小松市立博物館々員）が担当した。

本稿を草するにあたり、御指導頂いた両氏はもとより、調査に協力いただいた北陸大谷高校地歴クラブと小松工業高校地歴クラブの諸君に感謝の意を表するとともに、調査を快諾いただいた一松芳美氏に衷心より感謝の意を表したい。

## Ⅱ 遺跡の位置

本窯址の所在する一貫山は行政的には石川県小松市二ツ梨町42番地にあたる。

平野部に面する標高20～40mの丘陵は第三期中・上部に属し、白山前山地帯として海岸線に平行して形成されている。この丘陵部に深く入りこむ支峡谷の一つ、二ツ梨町より戸津町・荒屋町に至る道路の通貫口部左側に位置する丘陵が通称〝一貫山〟とよばれる丘陵で、本窯址はこの丘陵の南西斜面に構築されている。

一貫山を含む二ツ梨町・戸津町を中心とする丘陵には、多くの窯址の存在が早くからしられていたが、現在、これらの窯址を包含して南加賀古窯址群[2]の名が与えられている。

## Ⅲ 調査の経過

一貫山須恵器窯址の調査は小松市教育委員会が主体となり、上野与一・土井輝男両氏の指導により、北陸大谷高校地歴クラブ員と小松工業高校地歴クラブ員が中心となり、昭和45年4月7日より同月20日まで実施した。調査は学校の終了をまって毎日2・3時間程度おこなったものであり、途中第2号窯址出土須恵器の盗難という調査体制を再検討すべき不詳事もあったが、奈良時代後半期に築造された須恵器窯址2基を確認するとともに良好な一括資料を得ることができた。

## Ⅳ 遺　構

本窯址の窯床は上下2面が確認されたが、これは下部窯が崩壊したのち、あらたにその上部に窯が構築されたことを示すものであって、一窯において、窯床が二度にわたってつくられたことを意味するものではない。以上の理由で、下部窯を第1号窯址・上部窯を第2号窯址として区別する。

第1号窯址

本窯は一貫山丘陵の南西斜面に斜面と同方向に築造され、その窯の中軸線はN－45°－Eを示す。

窯址は丘陵斜面に溝状に掘り下げて構築された、いわゆる「害窯」の形式に属するもので、大川清氏の分類による「半地下式」に相当する[3]。

窯の全長は9.90mを計る。焚口から燃焼部にかけてはやや傾斜するが、焚口より約2.50mの部分が窯でもっとも低く、これより焼成部・煙道部にかけておよそ20度の勾配をもつ。

窯の平面形は長持形を呈し、焚口がせばまっている。焚口の巾は約1.30mを計る。焼成部と燃焼部の境界は不明瞭であるが、焚口より約2.50mの部分を、①最終勾配の始まりであること、②窯巾がこのところから急に広くなることなどから、これに求めることができよう。窯最広部は焚口より約4.0mの部分で、約2.30mを計り、そこより僅かづつ狭ばまりながら窯尻で約1.0mとなる。燃焼部の窯壁はスサ混入粘土で補強されている。

第2号窯址

本窯址は形状・大きさともに第1号窯址とほぼ同一である。窯床の勾配は焚口より燃焼部にかけて緩くカーブして、焼成部にいたり約21度の傾斜で窯尻に連なる。特に明瞭な施設をもたないが、焼成部上部から下部にかけて、中軸線にそってややくぼんでU字状の窯床を有する。

## Ⅴ 遺　物

第1号窯址・第2号窯址からは多くの須恵器が発掘されたが現在整理中なので代表的な器種・器形を抽出して説明する。

(i)第2号窯址上部出土の土器

落盤した第2号窯址天井部上面の黄褐色粘土中より3個の土器が発見された。

（器高4.1cm、口径21.9cm、底径18.6cm）の如きの形状をなすものがあるが、発見されたものはこれ一点にとどまる。坏は紹介できなかったが、口径14.0cm前後のものが大多数で、台付坏にくらべて量的には少ない。

## Ⅵ 結　語

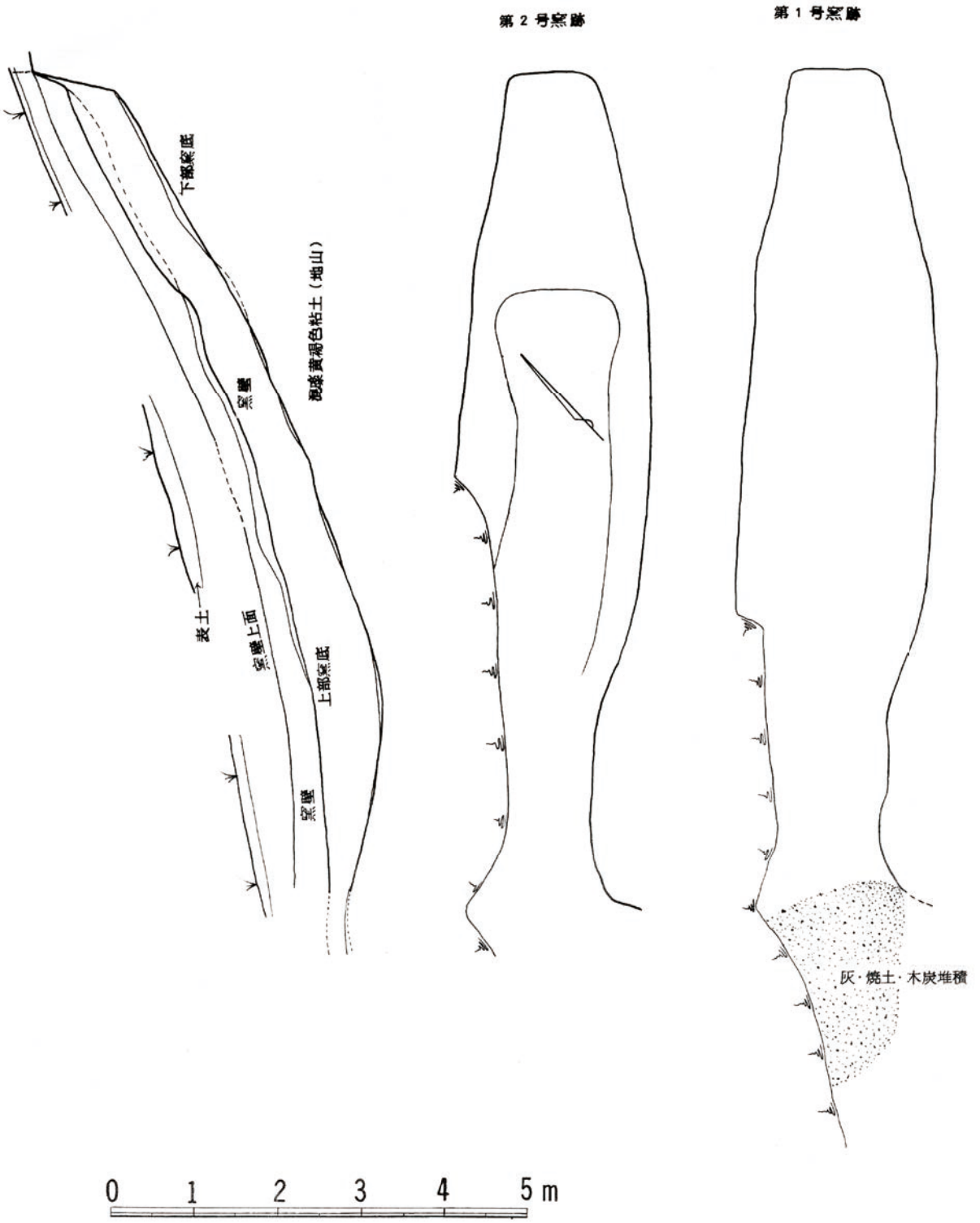
次に、これらの出土遺物の編年的考察を簡単に試みてみると、1～3は本窯址上部の黄褐色粘土中より発見されたもので、窯址とは直接切り離して考えねばならない。1は小形壺で、糸切痕をとどめる。糸切技法は800年前後の年代観が与えられている辰口町和気一号窯式に後続し、Ⅲ期後半に属する富山県中新川郡立山町上末窯[4]で普遍化するものと考えられているが、[5]当地方においてこの種の器形の発見例が少なく、器形・整形法により、実年代800年前半末ないし後半初と考えられる。2・3についてもほぼ同時期の年代観を与えて大過あるまい。

さて、窯址の年代観であるが、先ず第2号窯址では、唯一の広口壺に注目したい。

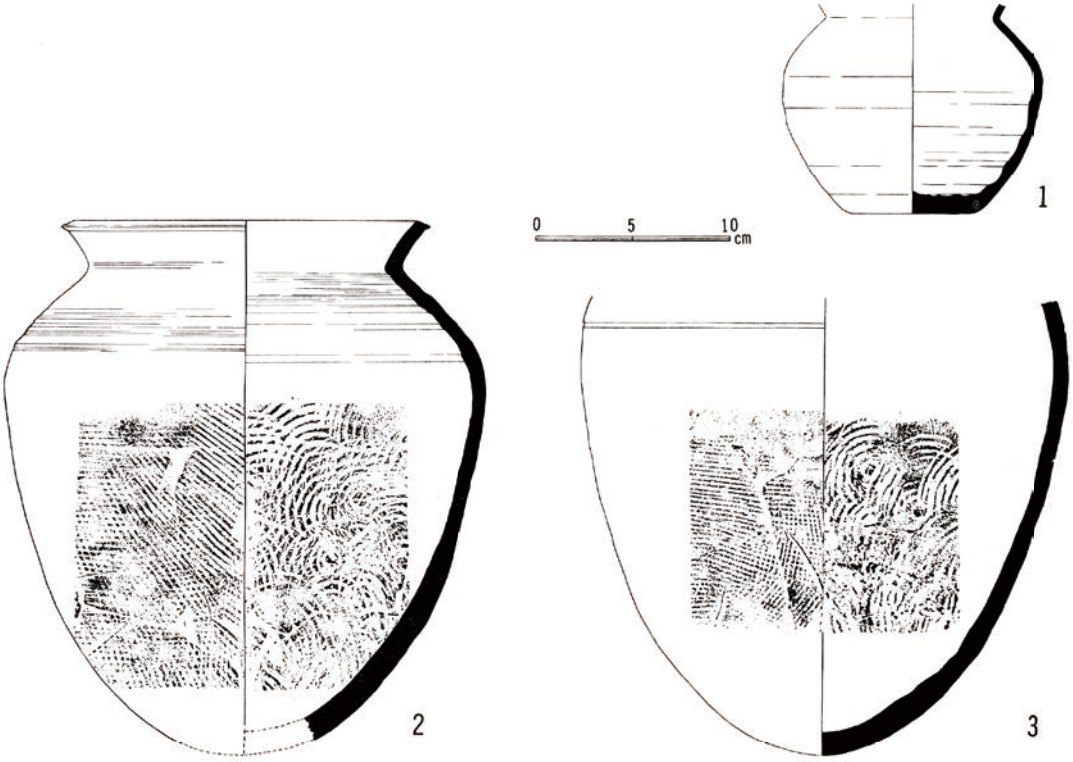
広口壺は出土例に欠ぼしく、厳密な考察は困難であるが、肩部や頸部に残る沈線はやや古い手法を残すもので、高台の形状も春木第3号窯式の特徴が残存する。[6]これらの特徴を他域の出土例と比較すると、福井県丹生郡宮崎村樫津窯[7]出土の広口壺では、稜角的に仕上げ外展する高台を有し、頸部からゆるく外反し、わずかにくびれて、やや外反する口縁端を形成する。この両者の違いは時間的な差というよりもむしろ地域的な差を多分に考慮すべきものと考えるのであって、奈良後期に編年されている樫津窯と同時又はやや後出的なものと考え、実年代を700年後半にあてたい。又、坏と台付坏の比率が約5対3程度で、春木第3号窯や和気第1号窯とほぼ同一に近いことも考えあわせれば大過ないであろう。

（文責　小　村　　茂　小松市立博物館々員）

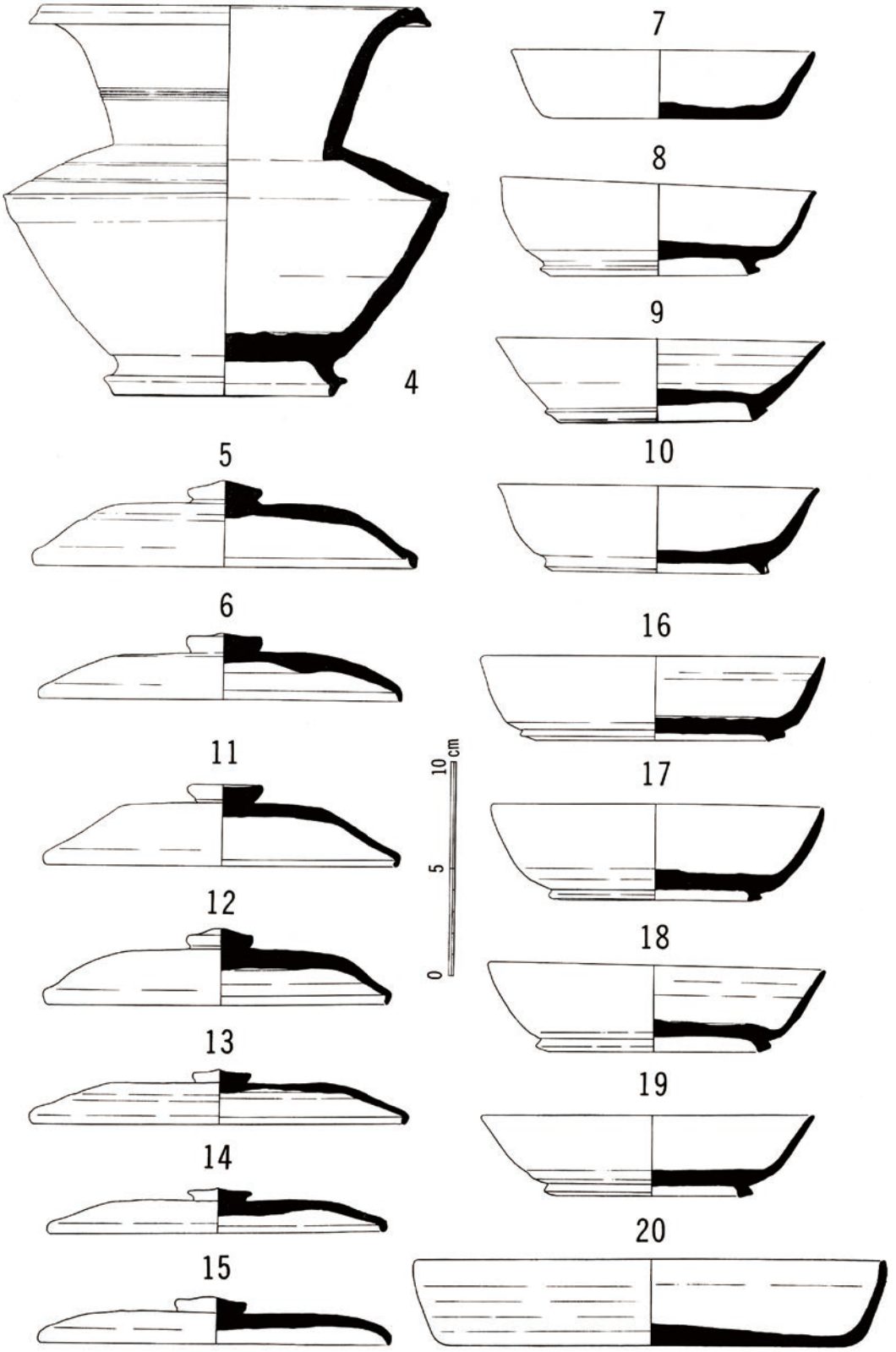
註1. 北陸大谷高校地歴クラブ「紀要」第5号（昭45）
2. 註1に同じ
3. 大　川　　清　「瓦の美」
4. 石川考古学研究会刊「加賀三浦遺跡の研究」
5. 註4に同じ
6. 浜岡賢太郎・嵯峨井亮・橋本澄夫・吉岡康暢
「能登鳳屋古窯址群の調査」石川考古学研究会誌9（昭40）
7. 水野九右衛門「武生市広瀬、野中窯跡調査報告」
武生市文化財調査報告埋蔵文化財篇（昭37）




第1図　一貫山窯跡実測図




第5図　第2号竪穴天井上面出土土師器実測図（1/4）


4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
0
5
10
cm